

殉教者を想い、ともに祈る週間

— ペトロ岐部と187殉教者の列福に向けて —



あなたがたは、わたしが種々の試練に遭ったとき、
絶えずわたしと一緒に踏みとどまってくれた。

ルカ22・28

日本カトリック司教協議会
殉教者列福調査特別委員会 編

目 次

この手引きの使い方	3
ペトロ岐部と187殉教者	5
はじめに	5
「ペトロ岐部と187殉教者」の列福運動はどのようにして 起こったか	5
候補者はどのように選ばれたか	6
列福のしくみ	9
188殉教者の現代的意識	11
結びに	13
日本の教会の霊性	14
霊性とは	14
わたしの記念として	15
日本の教会の「共通の記憶」を保つために	16
第1日 殉教を現代に生きる	17
第2日 殉教者を育んだ教会共同体	19
第3日 殉教者を育んだ家庭	22
第4日 殉教の教会を支えた信徒たち	24
第5日 女性の召命と使命	27
第6日 教会の将来を担う子どもたち	30
第7日 情熱と深い霊性を宿した司祭・修道者たち	32
第8日 秘跡を生きる教会	36
188殉教者一覧	39

この手引きの使い方

日本の教会の信仰の歴史が、わたしたちの「共通の記憶」となり、いまの生活を支える「靈性」となるために、この手引きは、できるかぎり共同体または家庭で使用されることをお勧めします。内容は「記念（アナムネーシス）」することを考慮して、下記の三つの次元を踏まえています。

「学び」（過去の出来事を想起する）⇒ 殉教者の歴史的な出来事を知る。殉教者に対する教会の教えを知り、深める。

「分かち合い」（いまに照らす）⇒ 殉教者の信仰と心情をいまのわたしたちの生活に重ね合わせて想う。殉教者を育んだ教会からいまの教会を照らす。

「祈り」（あすに向けて宣言する）⇒ 殉教者の信仰に倣い、わたしたちの具体的な生活の目標を定める。すでに列聖、列福されている殉教者の取次ぎを願って日本の教会のために祈る。

各テーマの構成

ペトロ^{きべ}岐部と187殉教者の列福を機に、日本の教会が「共通の記憶」を保つために、歴史の中で起こされた不思議なみわざをとおして語られる神のことばに耳を傾けます。それは、現代の日本の教会を方向付ける「靈性」を見だし、確認する作業でもあります。「殉教者を想い、ともに祈る週間」では、日本の教会の豊かな靈性を知り、黙想するために、毎日独自のテーマが示されます。

「8日間の黙想と祈り」の各テーマ

- 第1日 殉教を現代に生きる
- 第2日 殉教者を育んだ教会共同体
- 第3日 殉教者を育んだ家庭
- 第4日 殉教の教会を支えた信徒たち
- 第5日 女性の召命と使命
- 第6日 教会の将来を担う子どもたち
- 第7日 情熱と深い霊性を宿した司祭・修道者たち
- 第8日 秘跡を生きる教会

毎日の祈りと分かち合いを深めるため、各テーマは、つぎのように構成されています。

1. テーマ
2. テーマとかかわりのある殉教者のことば、または報告書の抜粋
3. テーマを深めるための聖書のことば
4. 解説（それぞれの殉教の出来事に宿されたメッセージを味わい、黙想するためのヒント）
5. 祈り

この手引きは「殉教者を想い、ともに祈る週間」に限らず、共同体の黙想会や養成の場においてもご利用ください。

ペトロ岐部と187殉教者

—— 日本の教会の自信と活気を願って ——

日本カトリック司教協議会
殉教者列福調査特別委員会
委員長 溝部 脩 司教（高松教区）

はじめに

ペトロ^{キベ}岐部と187殉教者の列福運動を始めて、はや25年の歳月を経ました。遅々として進まぬかに見えましたが、いよいよ列福の実現を迎え、当初からこの運動に関係した者として、これ以上の喜びはありません。

「ペトロ岐部と187殉教者」の列福運動はどのようにして起こったか

日本には26聖人と呼ばれる「パウロ三木と同志殉教者」、16聖人と呼ばれる「トマス西と同志殉教者」の42人が聖人として祭壇に上げられています。これに加えて205人が福者とされており、合わせて247人が殉教者として公認され、尊崇を得ています。ところがこの247人については、それぞれの事情があつての列聖、列福でした。

まず、日本26聖人については、幕末の日本が開国するに当たり、ローマが日本の教会の再興を願って列聖した経緯があります。同様

に205福者も、あれほど栄えた昔の日本の教会を考え、宣教再開を希望して列福したというのが事実です。すなわち、いずれも日本の教会が運動を起こす主体ではなく、ローマの主導のもとに行われたということです。しかも、これらの殉教の大半は、1624年以前に限られており、それ以降の苦しく厳しい殉教には触れられていません。トマス西たちの列聖は、日本の教会とあまり関係なく、ドミニコ会の主導で始められ、列聖された人びとも同会関係に限られました。このように、247人の共通の特徴は、前述のとおり、1624年以前に限られていること、圧倒的に外国人司祭と当時の男性指導者が大多数であることです。

日本の教会のすばらしさを認識し、活気ある教会にすることを目指して、日本カトリック司教協議会の主導で始まったのが、「ペトロ岐部と187殉教者」の列福運動でありました。そしてその意図は、188人が、たんに偉い殉教者であったというより、彼らの生き方とおして、現代日本に生きるキリスト者に、信仰をもって生きていくための示唆を与えてキリスト者のアイデンティティを深め、ひいては、日本の社会に強い影響をもたらすことができると信じたからです。そのため列福候補の殉教者は、日本全国の老若男女、とくに、模範となる家庭人や、代表的な日本人の司祭などを選択の基準にしました。また年代的にも1630年代の厳しい迫害の時代に殉教した代表的な人物に焦点を当てました。

候補者はどのように選ばれたか

日本の9教区（新潟、東京、京都、大阪、広島、福岡、長崎、大分、鹿児島）から、それぞれ代表的な殉教者が選ばれました。それまで、どちらかといえば長崎ゆかりの聖人福者が多かったように思

います。しかし今回は日本の教会全体を考えるためにも、北から南まで、できるだけ全国を網羅することにしました。問題は、今回の列福運動の対象にならなかった殉教者をもつ教区があることで、これに不満が残りました。しかし委員会の負担を考えると、結果的にそれも致し方ないと思われます。また教会法では、列聖列福の請願を行う権利は、原則として亡くなった土地の教区に属するため、当該の殉教者が生まれ育った土地の教区民が熱心に運動を進めていても、他教区の福者になる場合もあるので、そこにも不満が残りました。

4人の日本人司祭が、今回の列福の対象に含まれています。これに関しても、なぜ4人に限るのかという不満が残るようです。実際は、これ以上選ぶことは不可能でした。一人の生涯を追って、歴史的な検証を加えたうえで文書を提出することは容易ではありません。しかし、ペトロ岐部、ジュリアン中浦、トマス^{きんつばじひょうえ}金鏑次兵衛、ディオゴ^{ゆうきりょうせつ}結城了雪という卓越した4人の司祭は、グローバルな日本社会を生きる現代の司祭に、多くの示唆と勇気を与えるはずです。岐部神父は世界を歩いて回り、ローマまで行って司祭に叙階され、帰国して、拷問によって殉教する特異な生涯を送っています。中浦神父は少年使節としてローマを訪れ、見聞を深めたうえで司祭に叙階され、迫害が始まる日本に留まり、最後は西坂の丘において逆さつるしの刑で殉教しました。金鏑神父はマニラで叙階され、日本に潜入、長崎奉行所のお膝元で働き、妖術を使うといわれて恐れられたほど警吏を困惑させた司祭でした。足利將軍家の一族という高貴な出自の結城神父は、京阪地区を中心に信者の司牧に従事しました。

他に老若男女を含めた家庭人が集団として殉教したケースにも焦点を当てました。米沢、京都、^{やつしる}八代などの殉教がそれに当たります。

米沢の殉教では、司祭がいなくてという状況の中で信徒の指導者を中心として、どのように教会が保たれたかをはっきりと示してくれる殉教です。八代の殉教も同様のことがいえます。京都の殉教で光っているのは、信仰と家庭愛に勇敢に生き、殉教を遂げた女性です。京都の殉教録は、涙なくして読むことができません。

また今回の列福調査では、一家全員の殉教も優先しました。小倉、熊本、大分の加賀山一族、生月の西一家、有馬、雲仙での殉教家族などです。ディエゴ加賀山隼人とその家族の殉教は、現代のわたしたちに多くを考えさせてくれます。小笠原玄也とその妻みや（隼人の娘）、その子どもたちの遺書は、一つの信念を貫いて生きるとはどのようなことかを読む者に問いかけます。生月、有馬、雲仙の殉教者は、一家全員が励ましあって死を選んでいきます。信仰を次世代に伝えることに成功しているとはいいいがたいいまの日本の教会に、考える多くの材料を提供しています。

地域教会のカテキスタ、共同体の指導者といった人たちにも焦点を当てました。天草の教会を守ったアダム荒川、長崎の「ミゼリコルディア（慈悲）の組」の頭ミカエル薬屋、カテキスタとして働いたイエズス会の修道士ニコラオ福永ケイアンなどがあげられます。信徒の時代といわれてから相当の時間が経過しています。しかし、いまだに日本の教会は聖職者中心の思考を乗り越えることができないようです。つねに貫うことに慣れた貫い根性の教会から抜け切れていないところに、その原因があります。キリシタン時代のこれらの殉教者を見ると、現代の教会のあり方について大いに考えさせられます。フランシスコ会第三会員であるヨハネ原主水は、江戸の教会の指導者でありました。上杉家の家老の一人で、フランシスコ会第三会員であったルイス甘糟右衛門信綱も、米沢の教会では「談

義者」と呼ばれ、教会の教えを伝える役割を担っていました。

列福のしくみ

よく言われるのは、聖人になるにはお金がかかる、だから大きな修道会しか聖人を生み出すことができないということです。ここ二十数年、列福運動に携わり、司教協議会の列福調査の責任者になったわたしの体験からですが、冒頭に挙げた考えは、必ずしも当たっていません。もちろん委員には、委員会に参加するために、交通費の実費が支払われています。しかし研究費を含めて、他には一切支払われたことはありません。すべてはボランティアによって運営されています。最近になって「列福審査書」(positio)の印刷費を支払いましたし、莫大な量の「殉教者報告書」を要約して「列福審査書」を作成してくださったかたに、ほんの僅かなお礼を差しあげました。これは当然の謝礼であり、実際は適当な報酬といえる額を支払っていません。むしろ「殉教者報告書」を書きあげた人びとは、長い年月をかけて歴史を勉強し、それを書き上げるために莫大な費用と労力をかけていることを考えると、彼らの養成のために時間とお金を惜しまなかった教区や修道会、教育機関に感謝しなければなりません。

ここで、列福はどのように行われるかを説明しましょう。

まず地方教会から列福を願う嘆願がローマに出されることから始まります。その前にその地方において、その人が聖人ではないかとの定評があり、尊崇されていることが第一条件です。ついで当該の人物が亡くなった土地の教区司教は、列福を申請するために運動を起こし、資料を収集し、それをローマの列聖省に送ります。今回の

殉教者の場合は、日本の各地に散らばっていることもあり、日本カトリック司教協議会として、それをまとめて申請することにしました。日本の教会は、ローマにいる専門家に列福申請人（postulator）になっていただき、その申請人をおして列福の段取りが行われることとなりました。そのおもな仕事は、申請人のもとに送られる莫大な資料を要約して、一冊の「列福審査書」にまとめ、列聖省に提出することです。その「審査書」は報告官（relator）をおして列聖省長官に送られます。長官は提出された順序に従って、列福審査を省内で行います。「審査書」は、まず列聖省の歴史調査委員会に回され、可否を問います。それから同省の神学者委員会に回されます。年間40件を消化するのが通常であるということです。じつをいうと、ここまでこぎつけるのが最大の難関です。わたしは司教協議会の代表すなわち列福調査特別委員会委員長としてこの難関にかかわってきました。そのために何度も列聖省を訪問して、日本の実情を説明し、早めに審議に入っていたきたいとの希望を伝え、嘆願しました。そして列福の実現は、教皇自身が「よし」という承認を示さない限り前には進めないということが分かりました。司教協議会の合意をいただいて全司教の署名入りの嘆願書を作り、それを白柳誠一枢機卿にお願いして、直接、教皇ベネディクト十六世に手渡しました。

神学者委員会の手に渡ると、その意見書を2か月のうちに列聖省の枢機卿委員会に提出することが義務付けられているそうです。列聖省は、長時間をかけて読むことができない委員枢機卿のために「審査書」の要約の「要約」を作成します。同委員会で承認されると、いよいよ教皇のもとに送られます。教皇が裁可すれば、列福は「教令」（Decretum）として発布されます。いま、わたしたちが期待し希望

していることは、列聖省の委員会が、一日も早く188殉教者の列福を教皇に答申し、教皇がこれを裁可してくださることです。

188殉教者の現代的意義

わたしは多くの国や修道会の聖人伝を読んだつもりですが、誇りをもって、日本の殉教者を、きわめて優れた聖人に数えることができます。それは第二バチカン公会議に沿う現代の教会の生き方と、しっかりと合わせて考えることができるからです。

現代は「信徒の時代」といわれます。188殉教者の大半は信徒であり、司祭が不在の教会を生き抜いた人びとです。キリシタン時代は司祭がいなかったからこの形態を取ったとはいえません。司祭中心の教会から脱皮しようとしているのが現代です。多くの部門は信徒にお願いすることができるし、司祭は譲らないといけません。司祭は信徒とともに、現代社会に向かってどのように教会をアピールするのか、真剣に考えなければなりません。また信徒の養成を真剣に考える時が来ています。今回、列福される殉教者は、教会とは何かという問いに、大きな示唆を与えてくれます。米沢の殉教はその最たるものであり、ルイス甘糟右衛門は、当時の司祭不在の教会にあって、教会の教えを堂々と伝えた信徒会長でありました。

家庭の大切さは何度繰り返してもよい現代の課題です。現在の日本に生きる熟年の信徒の中には、自分たちの信仰を次世代に伝えられなかったと、胸を打つ人が多いと思います。それはけっきょく、自分個人の信仰でしかなく、いわゆる常識的現代社会の価値観を踏襲したに過ぎない信仰だったことを意味しているのではないのでしょうか。青年の教会離れは起こるべくして起こったのです。信仰を中

心とした生き方が、わたしたち熟年にできなかった結果といえましょう。今回の殉教者を見ると、信仰がみごとに次世代に伝わっている姿を見ることができます。有馬や京都の殉教は、現代に生きるわたしたちに、家庭とは何か、信仰をもって家庭生活を生きるとは何かを、確かに伝えてくれています。熊本の小笠原玄也夫妻とその子たちの遺書を読むとき、いのちを賭してでも家庭愛と信仰を貫きとおすという決意を、その中に読み取ることができます。

同様に、今回列福される殉教者には、輝いている女性が多くいます。久しく男女共同参画がいわれていますが、女性の真の美しさ、強さをこれらの殉教の中に読み取ることができます。女性なしに現代日本の教会がないといっても過言でない現状にあって、信仰に生きる女性に大きな希望と慰めを与える列福であるといえましょう。

現代はグローバル化の社会です。世界的視点に立って、ことを判断し、福音を伝える必要があります。日本の教会も貰うばかりの体質からの脱皮が求められています。多くの宣教師と多くの物資を貰って育った日本の教会は、いまや大人として成熟した教会に向けて歩もうとしています。その先頭に立つ司祭たちは、率先してその道を歩まねばなりません。そのために、日本の風土に生まれ育った司祭たちは、現代社会の必要にこたえるべく、聖性と学識、どこでも働く気概と勇気、あらゆる困難にもめげない忍耐と剛毅などが求められています。岐部神父のスケールの大きさ、中浦神父の忍耐、金鐔神父の豪胆さ、結城神父の繊細さ、いずれも現代に苦勞して生きる司祭への示唆あふれるメッセージです。同様に、世界に向けて宣教師を送った当時の日本の教会のあり方を、真剣に考える時が来ているといえるでしょう。

結びに

ペトロ岐部と187殉教者の列福を目前にして、わたしたちは胸を張り誇りをもって日本の教会の素晴らしさを訴えたいと思います。世界に比類ない殉教の歴史は、日本の教会の誇りです。188殉教者の列福を機に、日本の教会において殉教者への熱い想いを込めた尊崇が生まれることを期待して止みません。

『家庭の友』（発行サンパウロ）2006年5月号掲載の記事を改定して掲載

日本の教会の霊性

——「殉教者を想い、ともに祈る週間」を準備するために——

霊性とは

日本において「霊性」ということばは、人間が絶対的な神秘に対してどのようにかわるか、という広い意味で用いられています。キリスト教的な意味合いで「霊性」という用語が使用されるようになったのは、17世紀以降のことです。カトリック教会が用いる「霊性」は、イエス・キリストをとおして与えられた救いの福音を、個々の人間がどのように受け止めるのか、そして、受け止めた福音によってどのように信仰を生きるかを表すことばです。

イエス・キリストによって与えられた救いの福音は、個々の人間または集団によって、それぞれの歴史的な背景や具体的な状況の中で受け止められてきました。民族、言語、文化、年齢、性格、教育などを背景にその受け止め方は多様です。つまり、イエスによって実現された救いの出来事は一つですが、いろいろな地域の人びとや各時代の教会の受け止め方は、さまざまに表現されてきました。

フランシスコ・ザビエルの宣教から今日まで、日本人は、伝えられた福音を独自の形で受容し、日本の教会に受け入れられてきました。とくに、長い迫害と殉教、潜伏という日本の教会独自の「信仰体験」は、この地方教会の霊性の基礎をなすものです。ペトロ岐部と187殉教者の列福を機に、この地方教会の歴史のなかで「神が起こされた不思議なわざ」を真摯に想い起し、その霊性を確認し、深めることにいたしましょう。

わたしの記念として

旧約のイスラエルの民は「伝えること」（申命記4・9－10、詩編78・1－4）を最大の掟にしました。「^{すぎこし}過越の出来事」を繰り返して伝えることで、民の自己認識と生きるべき方向を確認したのです。

「これをわたしの記念として行いなさい」（ルカ22・19）。イエスは救いの神秘を聖体の秘跡に託しました。「わたしの記念として」と訳されるギリシャ語の「アナムネーシス」（記憶、想起、記念）は、「伝える」「思い出す」といった「単なる記念」よりももっと豊かで、生命力にあふれた内容をもったことばです。あの晩さんの儀式の中で、何をイエスが教え、どのような生き方をし、そのためにどのような苦しみを引き受けたのか……そのことをいつも目の前に置き、忘れないようにこころに刻みなさいと、イエスは命じられたのです。イエスが命じられた「記念する」には、三つの内容と働きが宿っています。「イエスの十字架と復活の出来事を想起し」（過去）、「いまのわたしたちの生活に照らし」（現在）、「あすに向けて宣言する」（未来）。キリスト者の生き生きとした信仰生活は「イエスを記念することから生まれてくるのです。

初代教会の時代から大事だったことは、共同体としてイエスへの信仰をどのように保っていくか、どのようにしたら共同体がイエスの記憶を「共通の記憶」（アナムネーシス）として保つことができるかということでした。教会の信仰は、個人の記憶ではなく「共同体の記憶」のうえに成り立っているからです。主の日の集まりとミサも、福音書の編さんも、共同体の「共通の記憶」を生きるためでした。やがてイエスの福音が広まっていく中で、それぞれの教会の信仰の歴史も、この「共通の記憶」の中に含まれるようになります。今日行われているローマ・ミサ典礼の第一奉献文（ローマ典文）は、

殉教時代のローマ教会を背景にした記憶です。「イエスの福音」と「この地で起こされた神の不思議なみわざ」を「共通の記憶」として、各時代の教会とそれぞれの地域の共同体に独自の霊性が生まれ、信仰者はその霊性に支えられて生きてきたのです。

日本の教会の「共通の記憶」を保つために

2001年3月31日、教皇ヨハネ・パウロ二世は、日本の司教たちに向けて次のように語っています。「日本の教会の最初の世紀は、殉教者たちが示した勇気と神への忠実さという信仰の消えないしるしによって飾られました。彼らの英雄的なあかしは、日本の教会の過去を十字架につけられた主の輝きで飾るだけではなく、いまの日本の教会の歩むべき道と、将来の使命と約束をも示しています。」

ここに日本の教会が「記念して」生きるもう一つの「共通の記憶」があります。それは、日本人として福音を受け入れ、その道に従って歩み、やがて信念を貫いて殉教した多くの信者たちの信仰の出来事が、日本の教会の霊性の源泉だからです。

この手引きは、ペトロ岐部と187殉教者の列福を控えて、日本の教会の「共通の記憶」を想い起こし、その独自の「霊性」を深めるための一助として準備されたものです。

第1日 殉教を現代に生きる

「殉教者の血は教会の種子となる」(マルチリオの勧め)

ヨハネによる福音書 12・24-26

解 説

1793年に長崎の浦上で没収された書き物が3通残されています。「マルチリオ(殉教)の鑑^{かがみ}」、「マルチリオの勧め」と「マルチリオの心得」の三部作です。これらはキリシタン全盛時代、司祭が不在になっていく時代、まったく不在になる時代と、それぞれ異なる状況のもとで書かれています。いずれも迫害の中で、信者が何をこころの支えとして生き、どのように殉教していくかの心得を扱っています。

「教会は迫害をもってしても衰えることなく、かえっていよいよ栄えるものとなった。その教えるところ、それは殉教者の血は教会の種子となることである」(マルチリオの勧め)。苦難をとおしてこそ教会は燦然^{さんぜん}と輝きます。殉教をとおして教会には新しい信仰の芽生えがあります。今日、日本に教会があるのは、わたしたちの先達たち、苦勞して蒔いた種子が実っているからです。同様にわたしたちが、いま苦勞して蒔く種子は、いつかきつと実るものです。それを信じて日々の信仰生活を大事にしたいものです。

「こころで信じることを公然と表現すること」(聖チプリアーノ)が殉教者には求められました。殉教者は信じたことを公然と表明し、そのためにあえて死を受けたのです。彼らはいかなるものよりも神を選び、信仰を公然と表明することを恥じることはありませんでした。転び証文に署名を求められたディエゴ加賀山隼人^{かがやまはやと}は、決してそ

れはできないと、主君の細川忠興ほそかわただおきに答えています。彼の娘みやの夫、小笠原玄也おがさわらげんやは「忠興様、あなたが何と仰せになっても、わたしは転ぶことはできない」と宣言しています。不退転の意志をもってイエスに従う生き方を選ぶこと、これが殉教です。その信仰を公に表明したから殉教にまで至ったのです。これを思うとき、わたしたちも不退転の意志で毎日の生活を生き、必要に応じてはっきりと自分の信仰を表明しなければなりません。「この世にあって神に由来する単純さと純粋さをもって生活してきたこと、これこそわたしたちの誇りであり、わたしたちの良心のあかし、殉教です」(オリゲネス)。

「殉教を証明するためには、殉教者を試し、栄冠を与えられるキリストが証人として立たれるだけで十分です」(聖チプリアーノ)。キリストだけが自分の生き方を証明してくださると、殉教者は固く信じています。彼らは、この世の証人ではなく、あの方、キリストをしっかりと見つめた人たちでした。京都のテクラ橋本は、火中であって目が見えないと泣く娘に“パライソ(天国)を見あげなさい”と励ましました。キリストのことばに信頼し、キリストを深く愛し、その生き方に徹して生きることを誓う人たちがキリスト信者なのです。

「二つのことを覚えなさい。一つは、決して自力に頼ってはいけないこと。この世の風評をもとに考えてはいけません。ただただ神様のみわざのみをまず想い、次いで自分の魂のこと、そして天国に至る道のことを考えなさい」(マルチリオの心得)。殉教の基本姿勢は神にまったくより頼むことであり、自力を捨てることなのです。何かがあると、決まって人に相談し、その助けを借りてことを解決しようとするのがこの世の習いです。殉教者を称えるわたしたちは、人生の区切り区切りに神に頼る選択を必ずしなければなりません。

祈り

殉教者に学ぶわたしたちに、信仰によって毎日の生活を生きるすべて不退転の決意をお与えください。

わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン

第2日 殉教者を育んだ教会共同体

「この迫害により、この小さな群れが、さらに小さくなりました。にもかかわらず、あわれみに満ちた豊かな恩恵を与えてくださった主に感謝が捧げられますように」
(セバスティアン・ビエイラ)

コリントの信徒への手紙一 12・4-11

ヘブライ人への手紙 12・10-13

解説

教会は司祭、修道者、信徒で成り立っています。信徒の時代といわれる現代、教会の中で信徒の役割が強調されて話されています。それは決して司祭の役割を軽く見るということではありません。むしろ両者があいまって教会を生き生きと発展させる原動力となります。キリシタン時代、日本の教会はじつに多くの司祭志願者を輩出しました。それはひとえに熱心な教会共同体があったことを意味しています。熱心な共同体は多くの司祭を輩出するものです。同時に信徒を育てることに熱心な司祭がいるところには、熱心な教会共同体が生まれるものです。両者は相関関係にあります。

キリシタン時代、「組」という組織がありました。これは教会

を下から支える基礎共同体をつくるのに大きな役割を果たしました。「ミゼリコルディア（慈悲）の組」は孤児の世話、病院の運営、日本全国から迫害のために逃れてくる人びとなどのために、社会活動を大きく展開しました。これは当時の社会から高く評価されており、禁教時代に入ってもその活動が公認されていたほどです。しかし、この組は、たんなる社会活動団体ではなく、祈りと霊的向上を何よりも大事にしていました。「ミゼリコルディアの組」をとおして、当時の教会は社会活動、社会正義、愛のわざといった現代にも通じる活動を展開していました。

「サンタマリアの組」や「ご聖体の組」は、教理教授から死者の埋葬に至るまで、教会独自の活動を多く行っていました。定期的な祈りの集まりがあり、霊的読書を欠かさず行い、司祭が不在であっても信徒自らが教会共同体を守っていました。「ロザリオの組」とか、「コルドン（紐）の組」は、ドミニコ会やフランシスコ会の司祭たちに指導され、誓約を立てた第三会員たちでした。彼らは迫害下にあつて教会共同体を守っただけでなく、ある地方ではむしろ宣教活動を広げていった人たちでした。これらの組の指導者の多くが日本の教会の殉教者になりました。迫害がなければ、その組からきっと多くの司祭が生まれたことでしょう。いずれも教会を下から支え、信徒の霊的な向上を目指した組織でした。

しかし、これが実現できたのは、当時の宣教師たちの先見の明によるところが大きかったといえます。良き指導者である司祭たちは、信徒の共同体をつくることに意を注ぎます。良き信徒の共同体は当然のように良き司祭を生み出すものです。この二つは、つねにあいまって進み、つぎの時代の教会を生み出します。司祭の召命が少ないといわれる昨今、わたしたちの共同体が、自立した、意識の

高い共同体づくりに成功しているかどうか、問い直してみる必要があります。同様に、どのような教会をつくりたいのか、当初の理想に戻って問いかけてみたいものです。

先見の明といいましたが、実際これらの信徒の組織をとおして、カトリックの信仰は、じつに250年間、司祭の不在にもかかわらず、ほとんど誤りなく伝えられたのでした。長崎では、水方^{みづかた}、繰り方^く、教え方といった人たちが信徒の指導者であり、彼らは洗礼を授けたり、教会暦を信徒に伝えたり、教理を教えたりして教会を守ったのでした。これが、長く厳しい禁教のもとでも信仰を伝え守りぬくことができた理由です。

祈り

祈りにこたえてくださる神よ、あなたは迫害の時代、日本の民の間で古くから尊ばれた忠実の徳を、キリストとの出会いの中で高め、聖化し、新しい価値として与えてくださいました。現代に生きる日本の教会が、たんなる熱心さよりも、むしろ神による人類の救いの計画に忠実にこたえていくことができるよう、必要な恵みをお与えください。わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン

第3日 殉教者を育んだ家庭

「おじ様たち、お母様をお叱りになっていますが、お母様一人がそうさせたのではございません」

(小笠原くり)

ルカによる福音書 9・46-48

マタイによる福音書 18・1-4

解説

ほそかわただおき細川忠興は幕府の動向に敏感であり、家臣に棄教を強制しました。細川家の家老の家族である小笠原玄也おがさわらげんやにも棄教を迫りました。しかし、玄也は信仰を表明してはばからず、そのために禄を失い、農村に住んで生活にあえいでいました。細川家の熊本転封てんぼうにともない、彼らも小倉を去り、熊本に一軒を与えられましたが、そこでも生活の苦しさはつきまといました。それでも、彼は信仰を公然と表明してはばかりませんでした。ついに訴人そにんが出て、主君細川忠利も一家を保護することは、もはや不可能になり、家族全員を召し取って座敷牢に閉じ込めました。座敷牢にあること50日、その間に彼らは16通の遺書を書き残しました。信仰の想いをつづったこれらの遺書は、読む人のところを打たずにはられません。

「宗旨を代えることとお達しがありましたが、永遠のいのちを捨て去るには忍びないと申したところ、11月4日入牢の次第となりました」(小笠原玄也)。永遠のいのちに代わるものは何もないと信じている一人の信仰者の姿がここにあります。そのために「上下15人入牢しました」と淡々と述べているのです。何よりも信仰を

第一に考える父親の姿を見ることができます。子どもたちはこの父親の一貫した姿勢を見て育っています。

「女性でありながら、このような死を受けることができる、何とありがたいことでしょう。ことばに表していうことさえできません。捨てることができない宗教ですので、このような事態になりました」(小笠原みや)。みやの父は1619年に小倉で殉教したディエゴ加賀かが山隼人やまはやとでした。みやは一人の女性として殉教の栄光を受けることに感謝と誇りを感じています。「何とありがたいことでしょう。ことばにいうことさえできません」とは、彼女のいつわらない心境なのでしょう。叔父たちは、子どもたちまで巻き込んだのは母親のみやの仕業だと思い込み、彼女を非難しました。これに対して次女のくりが、母親を弁解して述べたことばが、冒頭に挙げた「おじ様たち、お母様をお叱りになっていますが、お母様一人がそうさせたのではございません」という一文です。自分たちは、母親が強制したから死ぬのではなく、自らの意志で、あえて殉教を選んだのであって、母親を責めないでほしいと訴えているのです。この子どもたちの遺書には、この世に残る人びとへの深い愛情と自ら選んでいく死への想いが書きつづられていて、とても感動的です。

子どもは親の信仰を見て信仰に目覚め、信仰に生きることを学びます。教会に子どもがいない、青年が来ないと嘆く前に、親自身がどんな価値観をもって生きているかを問いかけることから始めることのほうが大事です。信仰を次世代にしっかりと伝えるには何が必要なのでしょう。大人世代はこれを真剣に考える時期にきています。子どもは親の信仰を見ています。いま問われているのは大人世代であり、子どもに責めを負わせてはいけません。

「入会の動機はわたしの自由な決心です」(ペトロ岐部)。19歳の

岐部は、イエズス会入会をこのように決意しています。自らの自由意志で決心して入会したいと述べているのです。子どもは親とともに、青年は霊的同伴者とともに、人生の大切な決断を行うことができたら、どれほど幸せでしょう。大切なことは、一人の青年が人生の大事な決断を神の前で行うことです。そして、その決断に至るまでの道程をともに歩む大人が必要です。

祈り

青年の教会離れが激しいといわれる昨今、子ども、青年たちのために祈ります。また彼らと直接、間接にかかわる両親、指導者のためにも祈ります。彼らに、与えられた人生を信仰によって生きる知恵と勇気をお与えください。わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン

第4日 殉教の教会を支えた信徒たち

「わたしの希望は、石や土でできた教会にあるのではなく、また時の移り変わりを免れえない司祭や、はかなく壊れやすいこの空の下のいかなるものにもありません。ただ、天と地の創造主である神にのみ希望をかけているのです」 (アダム荒川)

ルカによる福音書 22・7-13 23・26
使徒言行録 4・34-37

解説

キプロス島生まれのヨセフを、使徒たちは「バルナバ」という新しい名で呼びました。意味は「慰めの子」。バルナバの働きなしに初代教会は語れません。使徒たちにとって、仲間の信者たちにとって、そして何よりも神にとって、彼は「慰めの子」でした。キリストの教会が誕生し成長するところに、神はいつもバルナバを用意してくださる。日本の殉教の教会を担い導いたのも、各地のバルナバたちでした。

天草の志岐^{しき}を追放される時、ガルシア・ガルセス神父は信者たちの世話をアダム荒川に託します。若い頃、その過ちのために一度は死の淵に立った人、そして、「神の息吹」によって生きる者となった人、それがアダム荒川です。幼児の洗礼、病人訪問、死者の埋葬、迫害に怯える仲間への配慮。託された使命を果たすその献身ぶりは、長年にわたる教会への地道な奉仕のところに裏打ちされていました。その生き方は司祭不在の天草の教会のともし火となりました。「アダムの死は人びとを感動させた。弱さのゆえに信仰を捨てた人びとが、アダムの勧めと模範によって信仰を取り戻した。ある村では150人以上の村人が全員キリシタンであることを公言し、多数の村々がこれに倣った」(マツス報告書)。

「へりくだるころこそ大切です。信仰を貫き、いのちを捧げることは、もはや人間の力を超えた事柄であり、神の助けなくして殉教はできません。殉教するためには日ごろから神の教えに忠実であろうとすることが大切です。」これは米沢のルイス^{あまかすう えもん}甘糟右衛門が殉教を控えた仲間に説いた心得です。右衛門を中心とする米沢の教会は司祭なしの巡回教会で、信徒は組の組織によって支えられていました。右衛門はこれらの組を統括^{そうがしら}する惣頭^{そうがしら}でした。目覚めた信徒の

いる教会は社会に対して大きな感化力をもっている、それは昔もいまも変わりません。

手足の指を切られて生きるその姿を、「自らの苦難と嘲笑と人びとへの怖れをいよいよ大ならしめんがために放たれし人」と、ソテロの報告書が紹介する人、ヨハネ原主水^{はらもんど}。晩年、彼は浅草の信者たちの霊的世話役でした。

「体は不自由になって働くことができないので苦しみながらも、しかし、いつも天上の楽しみに浸っていた」(1615年報告書)。主水がその状態で生きていること自体がキリストの十字架の神秘を仲間たちに垣間見せました。「主水は、火焰^{かえん}がとくに猛威たくましく襲いかかったとき、特別に大切なものを抱きかかえるように焰^{ほのお}のまわりに腕を廻したのは、ひときわ人目を引き、大きな勇気を示すしるしとなった」(1624年報告書)。主水に激しく働きかけた神が見えてきます。

「兄弟たち、おのおの召されたときの身分のまま、神の前にとどまっていなさい」(コリント一7・24)。信徒は「神から招かれたのであり、自分の務めを果たしながら、福音の精神に導かれて、世の聖化のためにあたかもパン種のように内部から働きかけ、こうして信仰・希望・愛の輝きをもって、とくに自分の生活のあかしをとおしてキリストを他の人びとに現すように召されている」(『教会憲章』31)。

祈り

慰めの源である神よ、あなたはかつてキプロス島生まれのヨセフを選び、初代教会の「バルナバ」(慰めの子)とされました。同じように、日本の殉教の教会でも各地に信徒の指導者を立て、抑圧さ

れた教会と動揺する信者たちに慰めと希望をお与えになりました。いまでも小教区や地域の教会のために信仰と善意をもって仕える多くの役員や奉仕者を顧みてください。彼らが殉教者に倣い、その生活をとおして現代の教会の慰めとなりますように。わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン

第5日 女性の召命と使命

「女性でありながらこのような死を受けることができる、何とありがたいことでしょう。捨てることのできない宗教ですので、このような事態になりました」
(小笠原みや遺書)

マタイによる福音書 15・21-28

ルカによる福音書 8・19-21

ヨハネによる福音書 19・25-27

解説

女性は、いのちをこの世に誕生させる恵みと力を与えられています。さらに母親は、その授けられた新しいいのちを守り、育む喜びと使命も与えられています。同時に、人として、妻として、母として家族のために苦しみ、涙することも受けいれなければならないのです。さらに、その祈りと犠牲の模範によって、永遠のいのちを教え、育てる使命をも与えられています。

ディエゴ加賀山隼人^{かがやまはやと}の長女で、細川家の家老の三男、小笠原玄也^{おがさわらげんや}に嫁いだみやは、信仰に生き、信仰に殉じた女性として、また妻と

して、母として、模範を示しました。

みやの夫、小笠原玄也は、1636年1月30日、家族、奉公人とともに、領主 細川忠利の命により、熊本の^{ぜんじょういん}禅定院において斬首され、殉教したことは確かなことです。

細川忠利の父 細川忠興による禁教令が出されたとき、玄也は、「忠興様がどのようにお命じになられましても、信仰を捨てることはできません」と記した宣言文を提出するほどの堅い信仰を表しました。そしてのちには、殉教に至る真のキリシタンの姿を示しましたが、これは、妻みやと、その父ディエゴ加賀山隼人の影響が大きかったといわれます。

みやは、夫、子どもたち9人、奉公人4人とともに捕えられました。殉教するまでの50日間、座敷牢にあって16通の遺書を書き、こころの準備をし、親しい人びとへの感謝の気持ちを表しています。

冒頭に示した遺書の抜粋、「…このような死を受けることができる、何とありがたいことでしょう。…捨てることができない宗教です。このように事態になりました」と淡々と記されたことばには、みやの揺らぐことのないひたむきな信仰、決然とした意思と決意が滲みでています。

188人の殉教者の記録を見ると、幼い殉教者の傍らには殉教をともにする母親がいました。イエスの十字架の傍らに立つ聖母マリア（スタバト・マーテル）のように。わが子とともにあり、ともにいのちを捧げた母がいました。

1619年の京都大殉教による52人の殉教者の中には、12歳以下の子どもが11人、その中に2歳から4歳の子が6人いました。ヨハネ橋本^{はしもと たひょうえ}太兵衛の妻テクラは身重でしたが、5人の子どものうち3人とともに、一本の十字架に縛られました。すなわち3歳のルイサ

を腕に抱き、右側には12歳のトマスが、左側には8歳のフランシスコが縛られました。あとの二人の子ども、カタリナとペトロは隣の十字架に縛られました。娘カタリナが、炎に半ば焼けた身体を母親の方に向けて「もう何も見えなくなりました」と言ったとき、母テクラは、「そんなことは心配しないで。イエス・マリアのみ名を呼びなさい。もうすぐパライソ（天国）に着きますよ」と励ましたのです。そして、他の子どもたちを励まし、やがて火刑が終わったとき、テクラの腕は3歳のルイサを固く抱いたままでした。母として、子らにとっての真の幸福が何であるかを確信するからこそ、子どもたちと苦難をともにできたのです。

八代の^{やつしろ}殉教者の一人、7歳のルドビコ南は、父の殉教の後、母とともに捕えられ、処刑場に向かう^{かご}駕籠の中でも母と一緒にでした。ルドビコ少年と母マグダレナの十字架は向かい合って立てられました。母が「イエス、マリア」と言うとルドビコも同じように「イエス、マリア」とこたえて、息を引き取るまで続けました。幼い子は母と同じくすることに安心してすべてを委ねることができました。それは日々、母の祈りとことば、行いによって^{つちか}培われた幼子の澄んだ信仰でした。

祈り

聖母マリアの取次ぎによって祈ります。いのちの与え主である父よ、聖母マリアがイエスの母となって、十字架上の最期まで付き添われたように、すべての女性がその母性をもって、幼子のうちにこの世のいのちと永遠のいのちを育む喜びを味わい、その使命を果たすことができるよう、お導きください。わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン

第6日 教会の将来を担う子どもたち

「歩かせてください。

イエス様はカルワリオ山へ歩いて行かれました」

(ディエゴ林田)

ルカによる福音書 10・21-22

マタイによる福音書 19・13-15

解 説

1613年10月7日、長崎の島原半島、有馬川の中州で、3家族8人が柱に縛られ、火あぶりにされて殉教しました。

有馬の教会には、信者たちの信仰生活を助けるために、「サンタマリアの組」、「ご聖体の組」、「ミゼリコルディアの組」などが組織されていました。1612年、有馬で迫害が始まると信者たちは城下町に新しい組、「殉教の組」を結成しました。これは殉教できるよう祈り、苦行をもって神のおん助けを求める信心会でした。この大人の模範に倣って少年たちも「子どもの殉教の組」をつくり、大人に負けないほどの熱心さで祈り、苦行に励んでいました。12歳のディエゴ林田少年は、このとき、有馬の「子どもの殉教の組」のかしらでした。彼は、仲間とともに殉教の恵みを受けるために祈り、組の集まりでは皆を導き、ともに苦行に励んでいました。殉教までの記録は、素朴なところの少年が、精神的には立派な大人に成長していたことを伝えています。有馬の信者たちが殉教に立ち合おうと集まってきて、捕われた人びとをすでに殉教者としてその取次ぎを求めると、ディエゴ少年は、「死ぬ前にその名はふさわしくありま

せん。でもその名前をいただくのはうれしいことです」と言いました。そして、「まだまだ。まずオラショ（祈り）を頼みます」と、皆の祈りに支えられることを願ったのです。オルファネル神父はディエゴ少年のこのことばを日本語のまま記録しています。

ディエゴ少年のこれらのことばは、長崎の潜伏キリシタンが殉教の心得として伝えてきたことを思い起こさせます。「殉教とは死ぬこと、殉教は神からの恵みであること、人は皆弱いので、殉教のとき力を与えられるよう、普段からいつも祈りと苦行に努めること」などです。

処刑が、日之江城の前を流れて有明海に注ぐ有馬川の中州で行われることを知った信者たちは、ろうそくとロザリオをもって集まり、川の両岸で祈りながら見守っていました。

川を渡るとき、一人の役人が12歳のディエゴ少年を背負って渡ろうとしましたが、「歩かせてください。イエス様はカルワリオ山へ歩いて行かれました」と、それを断りました。十字架の苦難を経て栄光へと変えられる救いの神秘を、神様は幼い子どもに示しておられたのでしょうか。殉教がイエスに導かれる至福への道であると、彼らは信じていました。パライソ（天国）でイエスとともに永遠の幸せが待っていることを教えられ、疑うことなく信じていました。だから、イエスがなされたように、少年も歩くことを選びました。

父^{はやしだ すけえもん}レオ林田助右衛門、母 マルタ、姉 マグダレナ、そしてディエゴ少年は、それぞれの柱に縛られ薪に火がつけられました。

「聖少年ジャコベ（ディエゴ）の両手をくくった縄も焼かれた。火が^{じゅばん}襦袢や下ばきや髪の毛に移ると、イエスの甘美な御名を唱えながら母のもとに駆け寄った。すると母が天を仰ぐようにいい、そこで少年は母の傍らで魂を創造主の御手に委ねた」と、殉教報告に記

されています。姉のマグダレナは綱が焼け落ちるとひざまずき、足元の燃える薪を手にとって頭上にかざしました。こうして、燃え尽きることのない信仰と感謝のしるしを示すと、力尽きて静かに横たわったのです。

有馬の教会の最初のあかしは、神が信仰の神秘を「幼子のような者にお示しになった」ことを示して、それによって、教会がイエスとともに喜びにあふれて感謝することを教えています。

祈り

天地の主である父よ、あなたに賛美を捧げます。あなたは、幼い殉教者たちに天の国を示してくださいました。わたしたちにも至福の道を悟らせ、イエス・キリストのみ跡に従う力をお与えください。わたしたちの主、イエス・キリストによって。アーメン

第7日 情熱と深い霊性を宿した司祭・修道者たち

「わたしは、自分の召し出しに満足しています。そして自分自身と同胞の救いのために前進しようという大きな希望を抱いています」 (ペトロ岐部)

「岐部ヘイトロは、転び申さず候」

(宗門奉行 井上筑後守の調書)

ヨハネによる福音書 10・9-11 21・15-19
ヘブライ人への手紙 5・7-10

解説

188人の殉教者の中で、司祭はペトロ岐部、ジュリアン中浦、ディオゴ結城了雪、トマス金鏑次兵衛の4人。他に一人、ニコラオ福永ケイアンというイエズス会の修道士がいます。活躍した時期は異なり、生き方も独特ですが、その根底には、力強く波打つ共通の司祭のところが脈々と流れています。それは、主から託された羊の群れを、いのちをかけて守り抜く牧者のところ。その務めのほかは一切、眼中に入らず、神と人に献げつくす生き方を貫きとおす雄々しさです。しかもそれは、浮き立つようなきらびやかさや英雄の姿とは、およそ縁遠い、ひたむきで一途な生き方でした。

ペトロ岐部は、大分の水軍の家系に生まれ、幼いころからセミナリヨで学びました。のちに追放令のため、他の仲間たちとマカオに移ります。かの地では司祭への道が閉ざされたため、ペトロ岐部は船でインドへ行きました。そこでも叙階が叶わなかったため、ローマへ行く決心をしました。らくだの隊商に入れてもらい、シリアの砂漠を徒歩で横断し、パレスチナに辿りつきます。そして、おそらく日本人として初めてエルサレムで聖地巡礼し、今度は海路、ローマに辿りつきました。それからすぐに司祭に叙階され、続いてイエズス会への入会が許されました。そのとき書いた調書の一節が、冒頭に示した「わたしは、自分の召し出しに満足しています」ということばです。

船で帰国を試みますが、途中で4回も難破。ようやく日本に戻った岐部神父を待っていたのは、過酷な潜伏生活でした。9年に及ぶ活動のあと仙台領内で捕えられて江戸に護送され、将軍家光じきじきの取り調べを受けた岐部神父は、激しい拷問により殉教。そのときの宗門奉行であった大目付井上筑後守政重が残した取り調べ調書

が、いみじくも彼の生涯を一語で言い表しています。

「岐部ヘイトロは、転び申さず候」

アウグスチノ会の修道司祭となったトマス金鐔次兵衛は、主から託された羊を守り抜くためには、どのようなことでもする牧者の姿を体現しています。次兵衛は、訪ねて来る信者や求道者を教会の自室で座して待つ司祭ではありません。迫害の時代、みだりに歩き回れば、それだけ危険が多く付きまといますが、次兵衛は奇抜な方法を駆使し、さまざまな姿に身を変えて役人や密告者の目を逃れ、いろいろな地域の信徒を訪れては秘跡を授け激励し続けました。

ジュリアン中浦は、中浦地方代々の城主、小佐々家に生まれ、有馬に開校したセナリヨの一期生になりました。ほどなく、巡察視ヴァリニアーノによって遣欧使節の一人に選ばれました。ジュリアンは、この頃、あたかも時の人であったように思われます。しかし帰国後、秀吉の誘いを辞してイエズス会の修道生活に身を委ね、司祭叙階を経て殉教に至るまで、生涯は苦難に満ちていました。母親の猛反対を制して遣欧使節の副使として渡欧したものの、つねに病気がち。高熱のため、かんじんの教皇謁見に臨めない悲しみを味わいました。勉学の間、ラテン語の試験に失敗して留年。司祭叙階には28年もかかりました。少年時代の華やかさと比べれば無残なほどの苦しい目にあっても、ジュリアンのこころを捉えて離さなかったものは、高名な司祭としての栄達ではなく、一牧者として羊に自分を与え尽くす一修道司祭の生き方でした。

イエズス会の修道司祭ディオゴ結城了雪は、武家の出らしい質実剛健な生き方を特徴としています。あまり目立たない存在ですが、徳川期で最も長く活動した宣教師の一人であり、一時は、京都の教会を一人で担ったようです。教会の運営を信徒に任せ、ひたすら聖

体とゆるしの秘跡を授与するために各地を廻ったと、当時の文献は述べています。こうして、司祭が激減していく教会の自立を実現しました。

修道者ニコラオ福永ケイアンは、司祭ではありませんが、当時、説教を許され、福音宣教に情熱を燃やしました。意に反してマカオに送られましたが、かの地では仕事がありませんでした。しかしケイアンは他の若者のように還俗したり他の修道会に移籍したりせず、じっと耐えて帰国する日を待ちました。帰国するや、長崎を中心に、方々の信徒を訪ねて説教しました。イエズス会に入って32年目、54歳でようやく最終誓願が認められ、ほどなく殉教しました。

以上の司祭・修道者の生き方を見ていくにつれて、現代に求められる司祭・修道者像の輪郭が次第に浮かびあがってきます。信徒・司祭・修道者が、こぞって教会を支えるよう求められる現代、曖昧になったといわれる司祭・修道者像を求めるうえで、大きな光になります。

祈り

生きる力の源である神よ、あなたは、その民のために自分を与え尽くしたペトロ岐部ら5人の司祭・修道者をとおして、神の愛の姿を示し、信じる者に生きる力と希望を与えてくださいました。光を求めてさまよう現代の教会を担うために自分を捧げ尽くす多くの司祭・修道者をお与えください。わたしたちの主、イエス・キリストによって。アーメン

第8日 秘跡を生きる教会

「あなたには何の恨みもありません。安んじてください」
(ガスパル西玄可^{にしげんか})

「いとも尊きご聖体は賛美されますように」
(パウロ内堀作右衛門)

マタイによる福音書 26・26-30

ルカによる福音書 24・28-35

ヨハネによる福音書 13・1-17

解説

「わたしたちキリスト信者は何のとりえもない貧しい者ですが、神様の子どもと呼ばれる身分にさせていただきました」(1620年島原半島からのローマ教皇への『奉答文』)。洗礼によって人は新しいのちを受け、キリストを着る者となります。しかし、わたしたちは、傷つき、壊れやすい「土の器に」(コリント二4・7)このいのちを納めています。人の弱さと罪は、このいのちを衰弱させ、喪失させます。

「主よ、あなたは何もかもご存知です」(ヨハネ21・17)。回心は神の恵みによって始まり、この恵みによって人のところは神に向きを変えます。八代のヨハネ南五郎左衛門^{みなみごろうさ えもん}は一度は信仰を捨てた若い侍でした。ここから罪を悔い、償いを果たした人にはゆるしが与えられるとセルケイラ司教に教えられ、1603年にこのころの向きを変えました。仲間の前で涙ながらに罪を告白したヨハネ南は、その後ゆるしの恵みに人生を委ねます。同年12月8日、彼は殉教者と

なりました。

「教会には水と涙があります。洗礼の水と悔い改めの涙です」(聖アンブロジオ)。どちらも再生のしるしです。神のゆるし(いつくしみ)に触れたとき、人は新たに創造されます。人びとの嘲笑と怖れのために「放たれし人」ヨハネ原主水^{はらもんど}、キリストの「苦労人」ディエゴ加賀山隼人^{かがやまはやと}。その殉教のそばには罪のゆるしを求める謙虚な生き方があります。「わたしは神の恵みによって、まだ十分な健康と堅固な精神をもっています。それで毎年告白できる四千人以上の人びとがわたしの責任に委ねられています」(ジュリアン中浦)。殉教の教会はゆるしの恵みを激しく求めた教会でした。処刑する者に対してゆるしのことばを発する殉教者、迫害されながらも隣人に情けを惜しまない弾圧下の教会、ともにゆるしの恵みを生きていたしるしです。

「すると群衆の中から走り出た一人の信者が受刑者に近づき、ご聖体の組のメダイを一人一人の眼前にかざしました。彼らは『ご聖体は賛美されますように』と三度唱えると、深く頭をたれメダイに接吻しました。やがて、女性と子どもから斬首されていきました」(米沢の殉教)。「執行人はパウロ内堀作右衛門^{うちほりさくう えもん}を縛って湯の中に逆さに落としました。すぐパウロを引きあげ、また投げ込む。引きあげられるたびにパウロ内堀は『ご聖体は賛美されますように』と唱えていました。三回目には、沈められたままその場に放置されました」(雲仙の殉教)。

殉教時代に入ると、イエズス会の報告書の中に「ご聖体の組」と呼ばれた信徒の活動が盛んになっていたことが伝えられています。殉教者の最後のことばは聖体を賛美する祈りです。弾圧下の信者たちの信仰を養い、殉教に至るまで成長させたのは聖体です。無名の

188殉教者一覧

多くの信者たちが殉教と聖体についての理解を得ました。「わたしは神の穀物であり、キリストの清いパンとして認められるために、獣の牙で粉にひかれるのです」(アンチオケの聖イグナチオ)。島原の乱の原城址から、いま鉄砲の弾から細工された多くのロザリオの珠が出土しています。戦いの道具を祈りの道具に打ち直した(イザヤ2・4参照)人たちがいたのです。かつてそこには「ご聖体の組」の旗が掲げられていました。昔もいまも「聖体はキリスト教生活全体の泉であり頂点です」(『教会憲章』11)。

祈り

いつくしみ深い神よ、あなたのゆるしがなければ、すべてははかなく消えていき、だれも清く生きてはいけません。殉教者たちを生かしたゆるしの恵みを、わたしたちの教会に求めさせ、その恵みで新たに生かしてください。また、キリストの十字架と死を記念する聖体をとおして、わたしたちの信仰を育み、あなたの慈しみをあかしする者にしてください。わたしたちの主、イエス・キリストによって。アーメン

		主な殉教者		殉教年月日	殉教地
1. 八代の殉教者	11人	ヨハネ南五郎左衛門	他 4人	1603.12. 8	熊 本
		シモン竹田五兵衛		1603.12. 9	八 代
		ヨアキム渡辺次郎右衛門		1606. 8.16	〃
		ミカエル三石彦右衛門		1609. 2. 4	〃
2. 山口の殉教者	2人	メルキオール熊谷豊前守元直		1605. 8.16	萩
		ダミアン		1605. 8.19	山 口
3. 薩摩の殉教者	1人	レオ税所七右衛門		1608.11.17	川内平佐
4. 生月平戸の殉教者	3人	ガスバル西玄可	他 2人	1609.11.14	生 月
5. 有馬の殉教者	8人	アドリアノ高橋主水	他 7人	1613.10. 7	有 馬
6. 天草の殉教者	1人	アダム荒川		1614. 6. 5	富 岡
7. 京都の殉教者	52人	ヨハネ橋本太兵衛	他51人	1619.10. 6	京 都
8. 小倉・熊本・大分の殉教者	18人	ディエゴ加賀山隼人	他 1人	1619.10.15	小 倉
		バルタザル加賀山半左衛門		1619.10.15	豊後日出
		小笠原玄也		1636. 1.30	熊 本
9. 江戸の殉教者	1人	ヨハネ原主水		1623.12. 4	江 戸
10. 広島 of 殉教者	3人	フランシスコ遠山甚太郎		1624. 2.16	広 島
		マチアス庄原市左衛門		1624. 2.17	〃
		ヨアキム九郎右衛門		1624. 3. 8	〃
11. 雲仙の殉教者	29人	バルタザル内堀	他 2人	1627. 2.21	島 原
		パウロ内堀作右衛門	他15人	1627. 2.28	雲 仙
		ヨアキム峰助太夫	他 9人	1627. 5.17	〃
12. 米沢の殉教者	53人	ルイス甘糟右衛門	他52人	1629. 1.12	米 沢
13. 長崎の殉教者	3人	ミカエル薬屋		1633. 7.28	長崎西坂
		ニコラオ福永ケイアン		1633. 7.31	〃
		ジュリアン中浦(司祭)		1633.10.21	〃
14. 大坂の殉教者	1人	ディオゴ結城了雪(司祭)		1636. 2.25	大 坂
15. 長崎の殉教者	1人	トマス金鏑次兵衛(司祭)		1637.11. 6	長崎西坂
16. 江戸の殉教者	1人	ベトロ岐部かすい(司祭)		1639. 7	江 戸

この冊子は、送料を除き、無料で配布していますが、皆様から寄せられたご寄付によって制作されています。

列福とその関連行事のために、皆様からの善意のご寄付をお願い申し上げます。

下記の郵便振替口座をご利用ください。

郵便振替 00160-1-483345

(宗)カトリック中央協議会 列福献金口

— ペトロ岐部と187殉教者の列福に向けて —

殉教者を想い、ともに祈る週間

2006年12月3日 初版発行
2006年12月10日 初版第2刷発行
2007年1月15日 初版第3刷発行

編 集 日本カトリック司教協議会
殉教者列福調査特別委員会

発 行 カトリック中央協議会
〒135-8585 東京都江東区潮見2-10-10
日本カトリック会館
電話 03-5632-4411 FAX 03-5632-4453

印 刷 (有)プリティック・ウィード

この冊子の一部または全部の無断転載を禁じます。

事前に当協議会事務局に連絡することを条件に、通常の印刷物を読めない、視覚障害者その他の人のために、録音または拡大による複製を許諾する。ただし、営利を目的とするものは除く。なお点字による複製は著作権法第37条第1項により、いっさい自由である。